

## 「ばあーば、まだだよ。」

青森県 第168番 善龍寺住職 清野暢邦

「ばあーば、まだだよ。まだ早いよ。まだだよ。」

今年21歳になるお檀家の青年の祖母に対する口癖です。この青年は心身に障がいがあり自分一人では食事や身体の移動もままならないのですが、母親と祖母から献身的な介護を受けて、日中は施設に通いながら三人で自宅暮らしをしています。母親としては、息子が自分の事を一つでも多く出来るように、そして、出来ている事が出来なくならないようにと願って心を鬼にして厳しく指導していました。祖母としては、時間ばかりが掛かって苦労している孫の姿を見ると切なくて堪え切れず、為にならないとわかっていながらもつい先回りをして手助けをしてしまいます。そんな時、青年の母親は自分の親である祖母を叱りつけるのでした。母親も祖母も、この青年を思いやっする愛情あふれる行いに相違はありません。その祖母が私に語りました。「孫は私を案じてくれています。私が孫を手伝ってしまうと、母親として娘は私を叱ります。何度もそれを見て覚えている孫は私を可哀そうだと思って、私がお母さんから叱られないようにと案じて、こんな事を言ってくれるのです。本当に心の優しい孫です。こんなに孫から思ってもらえるなんて、私は幸せなお婆さんです。」と、嬉しそうに笑顔を浮かべて。更に言葉を続けました。「これから先、私も娘も歳をとってだんだんと身体がきかなくなってゆきます。それでも、最後の最後まで、出来るだけ長く孫と一緒に暮らしてきたいのです。毎日、孫から幸せをもらっています。」と。

ただいるだけで、その場の雰囲気や和やかにし、接する周りの人々を幸せにする人の事を「仏さまのよう」と言います。この女性にとって孫の存在は仏さまそのものです。幸せは与えられるものではなく、自らが気付くもの。今そこに確かにある幸せをしっかりと受け止めて気付いているこの女性は、同じく心の優しい人です。自分が救っているのではなく救われている自分というものに気付き、感謝の思いで心穏やかに日々を送っています。

優しい心が優しい心と呼び寄せ育ててゆきます。優しい心、仏さまのような心に気付き、育み、自らが仏さまのように生きてゆく事を心掛けましょう。他人任せにしない一人一人の仏さまのような行いが、この社会をやがて仏さまの世界に仕上げたゆく力となるのです。